

## 明治・大正の女性画家展について

会期 令和3年9月9日(木)～11月21日(日)

幕末から大阪で活躍した文人画家で、野崎武吉郎の娘於達(柳江)に絵の指導した橋本青江(1828-1901)の作品を中心に、野崎家がコレクションした明治・大正期の女性画家の暖簾や掛軸などを展示しました。橋本青江とその娘橋本青蘋の掛軸などが台帳上に17本ありその中の数本は岡山県立美術館に展示されました。この企画は明治・大正期、男性社会のなかで活躍した女性画家は明治大正期書画家番付(表2)を見ると3%程なので普段こういった企画自体が少なく、ここにスポットを充てると面白い展示が出来ると思い行いました。

### 橋本青江の人となり

青江はもと播州(今の兵庫県)の生れだと思つてをりましたが、他の話ではやはり大阪の人で、而も船場で生れた人だつたらしいのです。今の堺筋平野町の角にある「澤の鶴」あの酒問屋の一軒か二軒おいて隣りがその生家だつたさうです。そんなわけでこの人は、元は相當の資産家の娘に産れたのださうです。それが、老後お氣の毒なほど落魄して死んでしまひました。青江は中年以後所々方々と移り住んでおりましたが、私が就いた頃は南本町にゐまして、その頃がまあこの人の全盛時代とでも云へば云へるでせう。その住居はちよつとした小さな處でしたが、小ぢんまりとして如何にも画家らしく住つておりました。何しろ青江といふ人は純然たる画家氣質の人で「わたしは画を賣るのではない、好んでかいてゐるのだが、世間が求めるからそれをわけてやるのだ。世間がこれに對して報酬をするので、わたしは賣るつもりでかいてゐるのではない」と云つたような愛想のない調子で、商質氣もお上手もみぢんもあつた人ぢやありませんから、何うも世間と調和しにくいところがありました。だから青江といふ人は、一生貧乏で通した人です。その超然たる高いところには感心するより外はなかつたのですが、それがために物質には恵まれずに終つてしまつたのは、まことにお氣の毒でした。橋本青蘋といふ人は青江の娘で、只今京都に住つてゐるはずですが、別に画笔を執つてゐるやうでもなし、其後の様子は明らかには知りません。青江はあれほどの先生でしたが、老後は大さうに落魄してお氣の毒でした。青江はその御息が名古屋に移れるので、一しよに名古屋にゆきましたが、その後京都に住んでゐましたさうです。それから病氣にかかつてだんだん衰弱すると、非常に大阪を恋しがつて、しきりに大阪に帰りたといひますので、大阪に連れて來たのだつたさうです。(注1)

掛軸の台帳は私が旧宅に勤務する前から写真も撮影されある程度把握していましたが、書画の端切れ小切れは写真もなく岡山県立美術館の古川様に調査していただきやっと台帳と実物が一致しました。この端切れの中から橋本青江の師匠である岡田半江の米法山水図を縮小した絵(図1)が発見されました。全くのイコールではないですが雰囲気は十分でています、是非とも見比べてください。当時の画家は現在のような写真がなく記憶できないため、模写が出来ないといい画家とはなれなかつたのでしょう。もともと岡田半江の米法山水図(図2)は橋本青江が野崎武吉郎に宛てた書簡(明治廿年十二月廿二日付)の中で

「西井様へ以拙書御相談申上置候  
半江先師米法山水幅実ニ  
珍敷巨幅殊ニ得意之画法  
随分可誇画ト心得候ニ付無拋方  
より依託ニ付備高覽候何卒御意ニ  
御叶被遊候ハハ御蔵所ニ被成被下候ハハ」  
(※解説 岡山近代史研究会会員 前田 昌義)

サイズ 205.8×91.5 cm

と紹介されていて購入しています。

この掛け軸の贄は

“仿

米元章落茄法

天保癸巳秋八月望後一日



図1

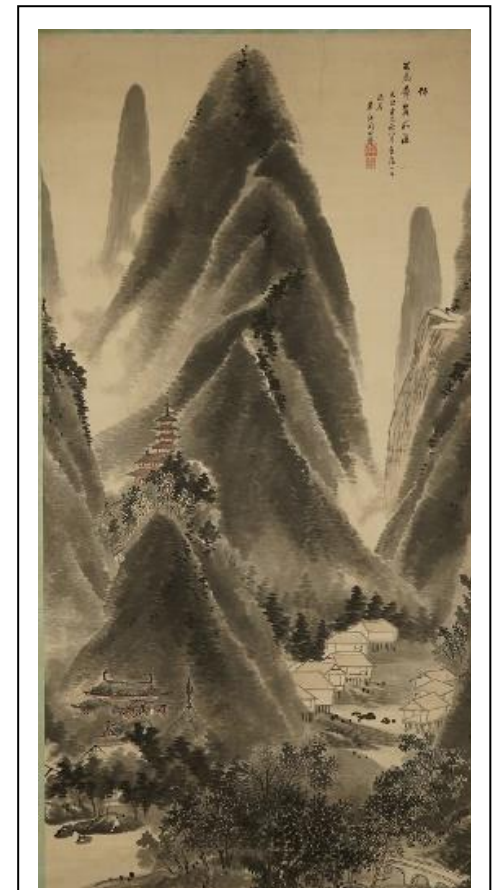


図2

## 浪華

半江岡田肅 “とあります。

※明治27年広島大本宮にて御覧品

※米元章とは米芾（べい ふつ、(1051 -1107)）は、中国の北宋末の文学者・書家・画家・収集家・鑑賞家であり、特に書画の専門家として活躍した。

※落茄法とは輪郭線を用いず、山の大体の形や木の枝幹を墨のぼかしで作り、その上に墨の点を重ねてかきあげる方法で、この墨の点描を米点と呼び、この手法を米法山水（べいほうさんすい）と呼ぶ。  
(注2)

※天保癸巳秋八月望後一日は天保4年(1833)8月16日

※半江が独自の画境を創案し、一家をなして世人の認める画家として大成するのは五十代に入ってからのものであるが、母を失った文政元年(1818)、半江三十七歳の作品「春社祭神図」「梧桐鶏図」、あるいは米山人死歿の文政三年の「山水図」をみると米山人流の山岳、岩石、樹林が描かれている中にも半江独自の神経質で繊細な筆使い、周到な構図、細かい配色の調和などが見出され、以前の単に米山水の画法を模しただけの作品と比較すると数段の進歩のあとがみられる。父母を失って、ようやく生涯の歩む道として画家の志す自覚が半江自身の心に芽えてきたようである。(注3)

※小米は米山人の命名によるものであろうが、米山人の子であるからとの理由のほかにも中国宋時代の米芾・米友仁父子が二代にわたって著名な文人画家として後世に名をのこし、父を大米、子を小米と愛称されたことに肖ろうとしたのではないか。米山人も五十歳を迎えてようやく世に迎えられる時代であるから小米の父の大米という自覚は一層強いものがあつたと想像される。このような米山人の願いにもかかわらず、半江は小米が小便に音通することから大変に気に病んでいたという。その故か二十一・二歳頃から半江の号を用いるのであるが、文政七年(1824)、四十三歳のときの「百恠図」の奥書に小米の落款を用いているので、中年すぎても時々使用したことがうかがえる。(注4)



図3

この書簡や模写した絵などが揃っているのが、野崎家の強みなのでしょう。

又蔵の中の西井多吉の遺物の中に数点橋本青江の作品があることは知っていましたが1点1点確認作業をしていませんでした。今回その中を調査すると橋本青江・青蘋・が描いた縮緬の布巾や今回チラシに使用した美しい暖簾(図3)が発見されました。最初は小さく折り畳まれていて広げた瞬間まだこんなにも素晴らしい作品が埋もれていたのかと随分と感動し直ぐに今回の展示のメインになると思いました。

賛(図4)

「師法了所」白文長方印

疎々淡々也嬌姿満朶薔薇分外奇

幸借春風一枝筆寫成花竹在簾帷

柳江女君弄筆被寫紅薔薇其画艷麗可賞余亦

素奥添翠竹与醜石其不足見也同女君玩而善

畫使白髮老嫗如余者遍之舍于時戊子清和月也

浪華女史瑩

「喬瑩私印」白文方印 「青江」朱文方印

「如南山之壽」朱文長方印

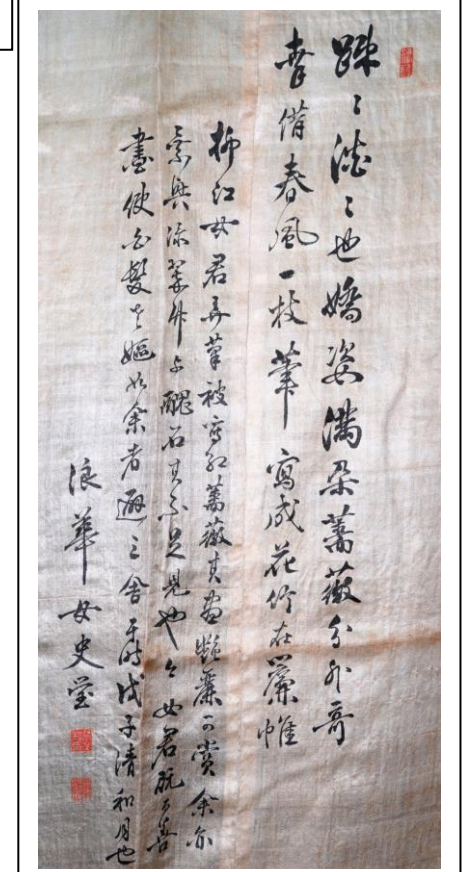


図4



(※解説 当館学芸員 三宅功一)

サイズ 173.4×132.0 cm

バラの花が垂れ下がり

春の風で枝がゆれて楽しいので、暖簾に花と竹を描いた。

柳江が艶やかで美しい紅いバラをかいてくれた。

私は竹と石を添えたけどそれでは物足りないから柳江のおかげで老嫗にもいい画が描けました。

とあるので橋本青江(60歳)が竹と石を柳江(17歳)がバラを描いた明治21年4月1日の合作です。

ただし柳江の款記は見当たらない。

この暖簾がどの様に使用されたかわかりませんが煎茶の時に使用されたのだろうか？

令和3年11月2日追暇堂にて明神祭後の食事会が行われましたが、床の間の掛け軸も青江・青蘋・柳江の作品が並んでいました。(図5)

賛

半簾花影枕書眠 (簾が半分おりて花の影を見ながら書を枕にして寝る)

壬午開春試筆 十一歳 柳江女史 (明治15年1882 十一歳)

竹影三更月 (夜中11時すぎ竹の影が見え)

爐香一縷雲 (香炉から一筋の煙が立つ)

彩濱製天然木 (彩浜が天然木を描き)

青江画如意大吉與平安富貴 (青江が靈芝・大きな橘の実・竹・花瓶・牡丹を描いた)

寓意(ぐうい)をこめた吉祥画である。

※ 如意大吉(靈芝と大きな橘の実)

※ 平安富貴(竹と花瓶と牡丹)

成華儷居

壬午新真写青蘋

(仙人の家 文人画の憧れの家)

特に柳江はこの時満10歳です。そう考えると書も画も才知があると思われま

す。売用日記より

明治15年11月1日

「午後6時より御主人様を初め橋本青江・高市彩浜・田辺氏・野崎四郎氏・五猿翁、何れも遠勢楼へ投宿之衛鑄生(通弁山本某)を訪はる。(11月4日帰途の別盃を催す)」

明治15年11月3日

「賓客支那人衛鑄生、陪從通弁山本某、橋本青江・高市彩浜・河辺青蘭・併セテ十八人ナリ(明神社祭典之客人酒筵)」

そこでいつから11月2日に明神祭を行っているのか、売用日記を調べると明治9年からは11月2日に行っていました。明治9年「十一月二日 本日は旧曆九月十七日に相当本日ヨリ明日ハ塩竈明神社祭礼奉祝依テ休憩 一同掃除ニ取掛ル也」明治2年は9月18日に「曇天、明神様御祭礼休ム、」とあります。西曆変換をすると1869年10月22日となる。なぜ9月17日なのか？ 神嘗祭(かんなめさい)に合わせたのでは、ないでしょうか。神嘗祭は、かつては9月11日(旧曆)に勅使に御酒と神饌を授け、9月17日(旧曆)に奉納しました。

神嘗祭は、その年に収穫された新穀(初穂)を天照大神に奉げる感謝祭にあたります。

※【明神】(「名神」から転じた語ともいう)神徳を尊崇するという語。

「名神」が「延喜式-三」にいう名神祭にまつられる特定の神格に限っての称であるのに対して、「明神」には祭祀上の限定はないという違いがあったが、その区別は次第にあいまいになり、中世以降「名神」の称は使われなくなって、多く「明神」を用いた。(注5)

最後に今回橋本青江という一人の作家を取り上げて調査していくとそれなりの人となり、女性教育に力を注ぎ、誠実で質素な生き方が分かってきましたが、野崎家の人々も文人画の内面性・精神性に惹かれていたのではないだろうかと思われま



図5

# 橋本青江相関図

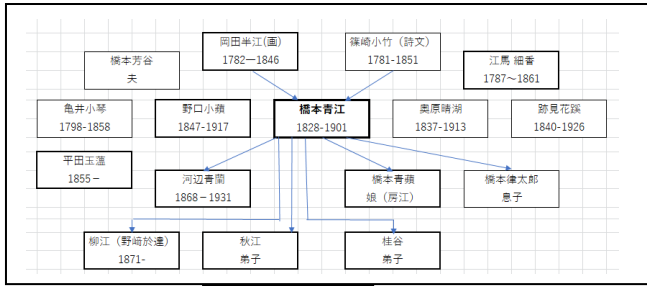


表 1

現故書画半紙位附	1892 (明治25) 古今名家新撰書画一覽
1879 (明治12) 古今名家南画一覽 第一集	1897 (明治30) 古今名家印譜古今美術家鑑書画名家一覽
1880 (明治13) 大日本現在名書諸大家撰集内	1902 (明治35) 古今名家新撰書画一覽
1881 (明治14) 古今名家改正南画一覽	1902 (明治35) 大日本繪画名大見立
1882(明治15) 繪画共進会出品画家々名一覽	1908 (明治41) 日本書画名覽
1888 (明治21) 古今名家書画景況一覽	1911 (明治44) 増補古今書画名家一覽
1889 (明治22) 古今名家新撰書画一覽	1927 (昭和2) 増補古今書画名家一覽
1891 (明治24) 現在今世名家書画一覽	1937 (昭和12) 改訂古今書画名家一覽表印鑑語
1891 (明治24) 古今博識一覽	

表 2

## 日本の文人画家

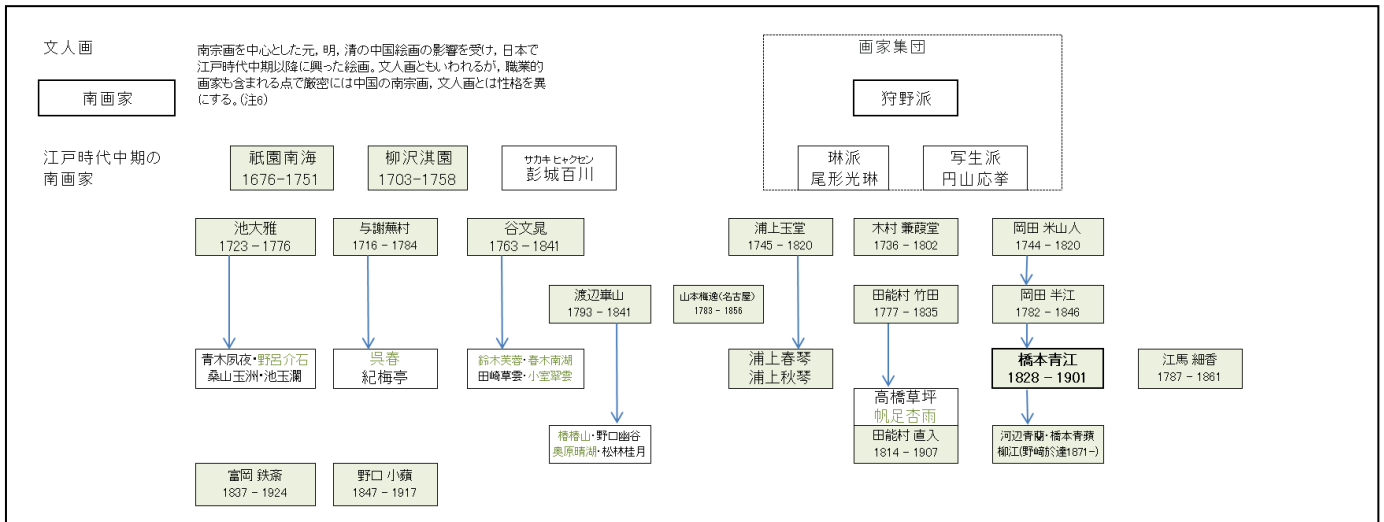


表 3

緑の枠及び緑文字の画家の作品は当館が所蔵しています。

(注 1) 河辺 青蘭 「青江女史の後半生」『大毎美術 第百六号』

(注 2) 脇本 十九郎 「破墨の意義の変遷に就て」『美術研究 14号』 P17-24

(注 3) 神山 登 「岡田米山人・半江父子の生涯」『古美術 53 特集 岡田米山人・半江』 P52-71 半江の生たちから画家への道

(注 4) 神山 登 「岡田米山人・半江父子の生涯」『古美術 53 特集 岡田米山人・半江』 P52-71 半江の生たちから画家への道

(注 5) 精選版 日本国語大辞典

(注 6) ブリタニカ国際大百科事典